故佐藤会長 追悼特集

故佐藤先生の人徳を偲ぶ

副会長　吉岡ふさ

故日本女医会々長佐藤やい先生、今日本女医会はようやく基礎ができたものの、これから前進して真に意義あるものにしなければならない大切な時に先生は逝去されたことは何とも残念なことです。

沢山の加盟国をもつ国際女医会をとり上げて見ても先生はその理事の一人に選ばれ、ようやく頻繁となる各国女医との交流にもご熱心に働きかけられ日本女医の真価が世界に認識されて来た先生の功績は大きいと思います。

先生のご性格はいささかの私心もなく、ほこらず、飾らず、誰でも笑顔で迎えて下され、偏らない信念を貫き、特に日本女医会の先頭に立って、巧みにこれをリードし、全会員から信頼されていました。

世の中に様々の貴重な人材は非常に沢山ありますが、あらゆる角度からみて先生ほどの人格者は余り多くは無いと存じます。

私はその一つでもあやかり度くても模倣できないのが現実です。

明日の命は測れないとは申せ、佐藤先生にあのような大患が潜んでいたとは毎日のように顔を合せる者さえ夢想だにしませんでした。

二月十六日本会理事会出席に先だって、入院中の先生を見舞い何か先生からお集りの皆様へお言付けか議題についてご意見があれば伺いたいと申しましたところ、そろそろ口渇もあらわれお水一口差上げましたら、

「よろしくね」

とただ一言だけでした。

それから五日、もう答のない昏睡に入られたのであります。

そうなるまでは先生の頭の中は会の現在と将来に色々のご希望や理想が画がかれていられたに違いない。もっと伺っておけばよかったと後悔をしています。

幽明を異にはしますが、会長の重籍にあられた先生、二六時中本会のことを心にかけていられた先生、どうぞ本会をよかれと祈り、彼方からあの温顔で会及び会員を激励して下さい。

弔辞

日本女医会
副会長　定方亀代

佐藤やい先生のご前にて、皆様と最後のお集りをいたすことは、何とも云えぬ感に打たれます。先生のご人格やご精神を思いますと感謝に堪えません。日本女医会の理事会などに参りますと、先生のお近くに座し、精神ともに接する事が出来、感謝しておりました。

先生は東京女子医大の教授として、人類の為に貴い医学を教え、国際的にも国際女医会理事としてご活躍下され外国との連絡もつき感謝に堪えませんでした。

三月一日

故佐藤やい会長に　従五位勲四等、瑞宝章が授与されました。

故人の偉徳を偲び謹しんでご報告申し上げます。

故 佐藤やい先生を偲びて

副会長　龍　知恵子

会長佐藤やい先生の急逝は、私共の日本女医会にとって青天のへきれきであります。

つい昨年末までは、いつもあの特徴のある元気なお声で議事を上手に処理しておいでになったのに。二月十六日の理事会ではじめて御病気を知り、その三日後にはもう重態で面会謝絶になったが、私は無理に吉岡ふさ子先生の御好意で、ソットお見舞をさせていただいた。心ならずもそのままアラビアのクエートへの旅に出た私は、臨終にも逢えない。お葬式にも参列できなかったので、いまもって佐藤先生の死が事実とは思えないのです。

はじめて先生にお逢いしたのは、たしか五十年の四月でした。日本女医会の再発足をするために鶴風会の理事長として、お呼び出しを受けた時です。その時はもう吉岡弥生先生が健康を害しておられ、佐藤先生が恩師の代理としてその頃衰微しはてていた日本女医会の再建に目を向けられたのです。

至誠会、鶴風会、加多乃会の三つの同窓会が一つに集まり、それに昔の済生学舎の頃の先生方や外国の大学を出られた方、又新しく男女共学の大学を出られた方々をさそって、日本女医会が吉岡弥生先生を会長としてはなばなしく再発足したのは昭和三十年の五月でした。

そののちも会長は御病気でズット佐藤先生がすべてを代行され、私共会員はついに一度も再発足後の会長としての吉岡先生にはお目にかかれませんでしたので、自然にその頃から佐藤先生が事実上の会長でした。

会長になられてからは一層あの円満な性格でよく会務を処理され、広い心とやさしい思いやりで、日本女医会の会合はいつも和やかな雰囲気で終始しました。

再発足した当初は日本国内各都道府県に支部をつくるために、北海道から鹿児島まで私共はよく歩きました。そのうち各県の支部発足が同時に行われ二人が手分けで歩かねばならぬようになり、日本女医会も充実しました。これから何か女医でなければできぬ事業でもやろうというところで、私共は会長を失いました。

佐藤先生は私の大好きな先生でした。病理学者というかたくるしさがなく、苦労した人のみが持つ世慣れたものやわらかな、女らしさに包まれた、ほんとうにいい方でした。日本女医会はより合い世帯なので、それをうまくまとめて行く、少しでも会員を増やして行く、その会員を離さないようにして行く、それだけでも苦労なことです。でも私はいつも佐藤先生に手伝って行くということに心からの楽しみがありました。此の会長のためなら何でもしてあげよう、どんなにも手伝ってあげようと思っていました。ふりかえると此の一年間は私は、先生を手伝うことを怠っていた。自分達の仕事に追われていた。申しわけなかったと思います。

昨年の後半から私は先生の闘志がにぶったのではないかとフット思うことがありました。

「疲れちゃってやり切れないの」という言葉を何度か聞いて、「お互いに年よ」と笑いあっていたが、やっぱり先生はあの頃から体の調子がわるかったのだと、今にして申し訳ない気持でいっぱいです。なぜもっといたわってあげなかったと悔やまれます。

日本女医会のためには大切な会長だった。私のためには唯一の相談相手だった。母校のことでも同窓会のことでも、何でも話し合ったのに。ほんとうに惜しい人を失くしたと思います。

日本女医会もこれからは一層みんなで先生の遺志をついでしっかり団結して、もっともっと隆盛な会になるように努力しましょう。そして先生の霊を慰めましょう。

会長佐藤やい先生を偲びて

副会長　川那部喜美子

佐藤やい先生

いろいろとお世話様になりまして、まことにありがとうございました。このように早く、このご挨拶を申し上げることになりましょうとは、誰が思ったことでございましょう。

先生は、いつも、明るい円やかなご表情で、美しいお声で迎えて下さいました。私は戦後の日本女医会再建の顔合わせ以来、四人の副会長の一人として、引続きお世話になりました。時に「関西流」の卒直な意志表示が、会長としての先生をお困らせいたしましたこともありましたようでございましたが、常に寛容に抱擁し、やがては深い理解をもって応えて下さいました。私は地方の特色をもった花が日本女医会を飾る喜びを先生がご理解下さることを信じておりました。

一九六〇年の、初めての日本女医会代表団の西独の国際会議出席の時も一方ならぬご配慮にあずかりました。又昨年の総会では大阪十支部実現を、先生のお手で推進していただきました。深く感謝申し上げるところでございます。

先般（本年一月号）の大阪の機関紙に玉稿をいただきました。これはあるいは先生の最後のご原稿となりましたのではございますまいか。大阪十支部の各支部長の日本女医会誌への初の寄稿が、会長佐藤やい先生への追悼のことばになりましょうとは、まことに感慨も深うございます。

至誠会本部の会議室で、会議の後などで、あの福よかな吉岡弥生先生の写真の下の席で、「…吉岡先生がいらっしゃったら、こうもおっしゃったでしょう…」からとの佐藤先生のお言葉をしばしば承りました。師弟の間にいつまでも通う、信愛のお心を、お美しく又淡しく存じ上げたことでございました。常に母校内に在って献身的に考え行動なさっていらっしゃった先生のご生活の片鱗をうかがい知って、秘かに感動を覚えたことでございました。

そのご人格とご功績に相応しいご立派な、厳かなご葬儀、告別式、そして野辺おくりの最後のお別れ、哀しみの人々にたちまじって尽きぬお名残りを惜しみましたのでございましたが、しかもまだ夢のような思いがいたします。

棺を被って定まるという、そのことを、しみじみ感じました。私は今まで存じ上げておりましたよりも更に更に高く、真に美しいご人格の佐藤先生を識りました。会長として、女医の大先輩として、女性として、先生のお姿の輝きを仰ぎ見ました。

先生にもたれかかっていたと申してもよいような日本女医会のありさまでございました。全く茫然と途方に暮れる思いでございました。しかし、今日からは、心新たに、協力一致、補い合って、日本女医会を育てる努力をいたす決心でございます。ことに当りましては先生を偲び、反省や励ましの力といたすことでございましょう。

ここに、大きなご厚宜に心からの謝意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

佐藤やい先生の埋葬式後の供養の席にて

竹内茂代

二月二十七日に永眠されたやい先生の葬儀は三月一日大学と至誠会との合同葬によって盛大に行われましたことは、皆様ご承知の通りでございます。

三月四日が初七日に当りまして、至誠会において佐藤家主催で供養が行われまして、それから長く住み馴れた御住宅に祭壇が出来、御遺骨が移されて二七日（十一日）三七日（十八日）と近親者友人が参集して読経と焼香の供養が行われ、四七日、五七日が過ぎ、四月十五日に七七日相当し、此日埋葬式が行われるので、御遺骨は祭壇から御長男の方に抱かれて、車で横浜中区本牧大里町の寺に移され、二人の僧の読経を受けられ、御家族友人の焼香を終え、元町の御夫君の墓に納められました。私はその車に同乗させて頂き、他の親友達とともに供養に参加させていただきました。

此日までお子様の手厚い御供養を受けられて、静に御夫君の傍に御眠りになられますことは、嘸ややい先生もご満足されることと推察いたします。

車中で本牧の道を通りながら、やい先生生前のご生活の一端を思い出し、忍耐力の強さに念じ入りました。

私は曾て佐藤御夫君のご葬儀に参列したとき、ご自宅は横浜駅から電車で一時間の距離にあることを知りました。今日埋葬式に参列して殆ど同じ道を通り駅から約一時間の距離でした。

やい先生が結婚されてから、御自宅から毎日学校までの御通勤なされた頃横浜駅から学校迄一時間半かかると、御宅から学校まで二時間半、往復五時間の交通時間、学校では病理学の講義を続けたときき、ご活動は並々ならぬ労力を要することと考えられます。

この活動を十四年間続けられたことは、アパートに移られた頃に承りましたが、今思えば実に偉大な忍耐力の持主であったと思われます。

学校では講義以外の雑務もありましょうし、家庭に帰れば御夫君の御用、御子様方の御世話で殆ど休息の暇もなかったでしょう。その頃お若くもあり体力も精神力も勿論旺盛であったでありましょうが、常人の及ばない活動力であったと思われます。

この忍耐力の強いやい先生が御病床に於ける苦痛の表現は余程苦痛の多いご病気であったと思われます。

福田屋に於ける最後の供養の席でも亡きやい先生の思い出が多くの人々から語られましたが、この偉大な忍耐力についてはどなたからも表わされませんでしたから、私の思い出を附記することにいたしました。

故佐藤やい先生への追憶

三神美和

佐藤やい先生が逝かれて早や三七日を迎えるのにまだこの事実を信じることができない。一カ月の入院、最後七日間の昏睡をして、あの立派なお葬儀など次から次と走馬灯のように頭の中をぐるぐるめぐるのである。

何か事あるごとに厚生補導部長室にお電話して、あの張りのある若々しいお声を耳にしていたのに、最早やそのお声も永久にきけなくなった。

趣味のため初めた謡曲のお稽古ではあったが、二年余りとなって先生も大分お上手になられたのに、最早やその席にも先生のお姿はない。稽古日の来る度に先生のお声が、お姿が、耳に目にちらついて離れない。

こんなにも深く大きく先生のことが自分の心を支配していたのか、という驚き、先生を失った心の痛手は時とともにつよくなって行くのである。

日本女医会、母校、至誠会の中心であられた先生は、本当に円満な人格と惜しみなき献身の持ち主であられた。特に日本女医会再建のため、日夜会員獲得に心を砕かれ、自分から卒先して各地に赴かれたあの熱意は、日本女医会員としてただ頭の下る気持で一ぱいである。また国際女医学会代表の渡航手続き、その他への至れりつくせりのご配慮は、はた目にも涙ぐましいほどの母性愛的印象を与えた。

各々一家言をもち、一見識をもつ日本女医会員の上に立って、これをまとめ、国際女医会の一翼を荷って行くためには、この大きな愛と抱擁力が最も必要なことである。

先生はこの点からみて、会長として最もふさわしい方であられた。

日本女医会再建もようやく軌道にのって来たとはいえ、なお前途多難の折先生を失ったことは歎いても歎ききれぬ痛恨事である。あとに残された私たち会員はこのショックから立ち上って今こそ力を合せて会の発展のため考えて行かねばならない。

このことこそが亡き会長佐藤やい先生の御霊を安じさせることになるのではないか。

毎日起居されたお部屋に飾られた微笑を浮べた先生のお写真はもはや物は言わないが、しかし日本女医会の発展をいつまでもいつまでも見守って下さるように見える。（三九・三・一九記）

宮城県支部結成のため、仙台にて故会長と真鍋理事（三三、六、一八）

会長佐藤やい先生の思い出

大貫セッ

私は早くから日本女医会の役員であったので時々接近していましたが静かな先生でした。

本年二月理事会の時並んで腰かけていましたので、話をしましたがそれが最後でありました。「先生私今日足が痛みます」「オヤそうですか、私も足が痛いのです診てください……」「ハイ」と申して診ましたが、「浮腫もないので早く診察をうけなさいませ、いくら医者でも相談は必要ですよ、そのほかどこも悪くありませんか」と申上げましたら、食慾がないとのこと……

私は学校に先生が沢山おられるでしょうから早く診察してもらって、ご相談なさいませと申上げました。それから十日ぐらいしてから、ご入院と承り早速見舞にゆき面会しましたが、その時はすでに危篤状態、あんなに早くお亡くなりになるとは思いませんでしたのに人間の寿命は分りません。

三月一日の告別式は盛大に、沢山の花輪につつまれて珍らしく立派に施行せられました。私は佐藤先生のご冥福のために禱りを捧げつつ帰りました。

佐藤先生をお偲びして

森　千鶴

思えば短い十年間で御座いました。昭和二十九年日本女医会に入会させていただき、その当時はまだ会長吉岡弥生先生が御健在であり、旧至誠会本部で親しくおそばに座らせていただいたこともあり、感激した日のことも思い出されます。

昭和三十年二月には吉岡弥生会長のお名でその年の五月日本女医会再発足後の第一回総会が日比谷松本楼において開催されるについての相談会が御座いましたが、会長先生はすでに御病床にあられましたので、それ以後の会合はすべて佐藤やい先生が主となられ開催されました。昭和三十四年五月吉岡会長御逝去後、同年十一月日本女医会会長となられ、すぐれた御素質を備えられた先生のもとで私達は安心して楽しく各会合に出席させていただきました。

本年一月末病をえられ御入院に際し肝臓がお悪いのではないかとのお話を伺い、故弥生先生御発病の頃の御手記に、右側腹部のツモールが堅く触れる（これは日本女医史の記事）とありましたのを思い合わせ、はっと致しました。御多忙の先生であられましたので並々ならぬ御苦心御心労も大きかったことと存じ、先生の御病気の一日も早く御快方に向われますようにと念じお祈りいたしましたのに、私達のこの望みも果なく、きびしかった冬の日も過ぎ春の訪れを待つばかりの二月末御病俄かにあらたまり突如永遠のお別れをしなければならなくなったあの日のことを思いますと胸うずく思いでございます。瞼をつむると御生前の先生のお姿があざやかに浮んで参ります。

常ににこやかな静かな笑をたたえられた面輪が眼に浮び、愛惜追慕の情が新たに胸に迫ります。日本女医会をこれまでに立派にお育て下さいました先生の御苦労を思いますと、私共はただただ感激の念で一ぱいでございます。今は心から先生の御冥福をお祈りいたし、又御遺族の御健康とご多幸を祈り、謹んで哀悼の意を表します。

葬送追憶（随想）

山本　杉

私たちは志を同じくし、時を同じくしてとひろく造って大勢はいれるようにして医者になった。

年々春がゆく頃になると、あの河田町の通りに枝をのばして咲きほこった陸軍経理学校の八重桜の美しさを思い出す。しかし今は桜はなく女子医大の講堂がそのあとにでんと構えている。

これは至誠会員が拠金して学校へ寄附した講堂であるが、そこでナンバーワンの葬式の主が自分であろうとは、まさか至誠会、学校を通じて中心の座にいた佐藤さんでも、その心に思ってもみないことであったろうと思う。

かつて戦災で焼失した学校の大講堂ができたとき、吉岡弥生先生は「自分の葬式はここでするつもりだから、三千人入れるようにしたいと思ったのだよ」など、いわれたことがあったが、私は佐藤さんの葬式のさなか、そのことを思い出して「こんなことならもっておくんだったわね」と当の佐藤さんに心の中でつぶやいたことであった。

それほどあの日のあの講堂は参会者の何分の一にも着席してもらえない小さいものであった。

参会者は講堂の外壁にみごとにならんだ各県支部の花輪にまずおどろいたことと思う。それは至誠会支部の勢ぞろいという感じで、当日の圧巻であった。次に会場に入ると白を主とした生花が祭壇を中心に場内のすみずみにまで幾重にも並んでおかれたみごとさ、会葬者が花にうずまっているという感じであった。

いよいよ告別のことも終り、最後の別れとなって棺は静かに下におろされふたが除かれた。まず子たち、孫たちから始まって特に親しかった至誠会員のひとりひとりが悲しみもあらたにまわりの花籠から花を一輪ずつつんでこれをたむけた情景、たちまち棺の中は顔のそばから足もとまで花でうまってしまった。

「死んだら花で棺のなかをうめてほしい、大好きなフリジアの花でね」などと語りあった若き日のあの解剖教室での学徒の詩はこのようなみごとな現実であったのか。

全生涯をかけて人体の病理を探求し人間の死というものには達観し切っていたであろうその心境は、佐藤さんの死の顔にありありとうかがえた。何の迷いもなく、素朴そのもののような死の顔にはび笑さえうかんでいたのである。

弔辞では佐藤さんのことを誰もが、やさしいひとといった。この年の卒業アルバムにおさめられたという最後の和服の写真が告別の写真にもなったのであるが、あのにこやかな円熟しきった人間味ゆたかな表情の底に私は一脈のつよさ、きびしさをみた。「われこそはささえんもの」を、この園に、残されし師のひと筋の願いを、といいたげな気持がありありとうかがえた。

ああ、しかし、もうすべては過去の頁にくりいれられてしまったのである。何か彼の女を永久に記念するスカラシップのようなものを、おりおり考える。

死とは何ぞや、私は子供の頃にはひたすらに悲しいものと受取っていた。十才のとき別れた伯母のなつかしさ、そしてそのときの悲しさ、今でもおもい出す限りにおいて、それは〃なぜ死んだのか〃と訴えたいなげきである。三十才のとき父に逝かれたときは、そのような悲しさはなく、病身の父を案じわずろうことから解放された心の軽さをいやというほど知った。更に夫を失って十七年、私はその夫の死が単なる悲しみではなく、そのおもいはいつの間にか私の心の哲学となり、そして観念に変ってゆくことを経験した。この死への深刻な観念は墓参や読経でまぎらすことのできない人間観の確立である。そしてその死者に耐して残るものは追憶のみであった。

今、友としての佐藤さんを失う、そろそろ死亡率の高くなる年令である。その序列は望みようもないことである。互にいたわりあい、なごみあうことにより先に逝った友への冥福の祈りといたしたい。

同級生を代表して弔辞を読む山本理事

佐藤先生の御逝去を悼みて

中西清子

佐藤先生の御逝去は未だ信じられない。あまりに御病気の経過が早く、私は必ず再起されると信じこんでいた。少しでも早くよくなっていただきたいと考えて御見舞にもあまりゆかないで御願い事や御相談事は全部補導課の方に依頼して連絡をお願いしていた。しかし出血後の御容態は全く楽観はゆるされず、いてもたってもおられない気持で病室と控室の間をうつろな気持でゆききしていた。心にはどうかどうか奇蹟がおこり御回復されますようにといのりつつ。

しかし先生は遂に永久の旅路につかれてしまわれた。

三日間のお通夜もその次のお葬儀もみんな悪夢であれかしと思いつつすごした。

昨日はもう四十九日、お線香の煙の中にほほえまれておられる御写真を拝見して、全く感慨無量である。

毎日一階におりてゆくと廊下でばったりと出会って、あら中西さん！　とおよび下さるような錯覚におち入る。公事につけ、私事につけ、いつも真先に、佐藤先生！と補導課の室にとびこんで御指示を受けたのに。もう先生の御声もしないし、御姿もみられない。丁度この本学本部建物ができ上って、先生は一階、私は二階なので最もお近い、したがって一層度々先生の扉をノックした。どんなに御多忙でおつかれであっても、いつもあのおやさしい御顔で私を慰め励まされ、またよき御導きをあたえて下さった。肉親の姉にもまさって私にとっては一番大切な大切な先輩であり、師であった。

日本女医会の事、大学の事、後輩の事についての御過労が、いつのまにかあの病気をつくったように考えられる。

佐藤先生、どうか日本女医会を天国からおまもり下さい。

故佐藤やい先生を偲んで

森寿恵

昭和卅九年三月一日、私は故佐藤ヤイ先生の御葬儀に参列して誰もが考えるであろうことは、かくも偉大な、そしてまれにみる立派な御人格を備えられた先生がなぜかくもはかなくこの世を去られたのであろうかという事である。私は当日佐藤先生を偲ぶ次々に読み上げられる弔辞を聞きながら止めどなく流れる涙をどうすることもできなかった。

私が日本女医会の理事をして出席の折、先生の議長としての議事進行ぶりことに、何日の場合にも温顔をたたえられて、一つ一つ皆の意見を採り入れて一つもむだのない、そしてなごやかなうちに会を終了させる立派なお態度は誰にも真似のできない完成された御人格の現われであろうと思います。

たまたま日本女医会支部結成式があり、招かれて先生のお供をして夜の上野を発ち、早朝六時頃駅前ホテルに着き、会の始まるまで休息することにしましたが、先生とともに躰を横たえながら種々先生の多岐に渡るお話に耳をかたむけ、ついに眠るはずの休息がそれどころでなく、早朝の食堂へ席をうつして人影のまばらなすがすがしい中で、又心ゆくまでお話を伺い、又お話申上げた記憶は全くわすれることのできない心と心のふれ合いでもありました。先生は日本女医会の将来の事から先生のお身の上のことに至るまで、私にはわすれることのできない思い出でございます。

又先生は医学博士であり、日本女医会の会長であり、東京女子医大の教授であられ、至誠会の副会長等々の要職をもたれても、そのいかめしい肩書を接する人々に与えない全くまれに見る女性らしい円満な人格を持たれた女性であり、妻であり、母であられた事を新潟行の一日で私はよく知ることができました。そして妻としても母としても又女医としても全く幸福であられたと信じられることが、私として急逝された先生を惜むせめてもの慰さめであり安らかさでもあります。

二月廿七日、御危篤の知らせを受け病院へ馳せ参じました時は御永眠の直後であり、御遺体が至誠会本部二階へ安置されるのを待ってお目にかかりました。お顔は少々お化粧をされていましたが、全く御生前と同じで少しのおやつれも見られず、いつものように笑いかけられるような錯覚をおぼえ、去り難い思いでお別れを告げたのでございました。

今は天国とやらにおられる先生、六十有余年の御生涯、御多忙の上に御多忙であられたことを思いますが、どうぞどうぞお心安らかにお過し下さいますように。なお私共のこの上の願いは女医の大先輩として日本女医会傘下の我々の行手に誤なきようお見守り下さいませ。

日本女医会会長故佐藤やい先生に捧ぐ

日本女医会愛知県支部長　森川みどり

叡知を秘めた童心、純情、温容そのままの先生と今幽瞑境を異にして筆を執らなければなりませんとは。先生には数えることができませんほど度々お目にかからせて頂きましたが、その都度の心温まる印象の鮮さは一つ一つ少しも薄らぐことなく、私の胸に刻まれております。

先生は私事に関するさまざまの御温情は申すに及ばず、先生を訪れられるどのような方々にも少しのわけ隔てなく胸衿を開いて、全くお心易く穏かにしかも適切な御力添えを惜まれませんでした。

ことに母校関係のこと、又日本女医会の会の内容の向上、発展に注がれました御気魄は、柔和なほほえみの奥に燃えつづけ、確固たる信念は人をして感動さす大いなる力となっておりました。数年後には日本で国際女医会も催される予測もあり、一段と先生の偉大な「和」の御力にあづからなければならない折に当って御長逝遊ばされましたことは、舵を失った舟に在る心細さを一しお感じさせられます。

憶えば御病篤しとの報に急遽上京いたした時、御当直の先生方や日本女医会本部の事務の方々の重々しい雰囲気をよそに、先生は浅春一刻御一睡の安らかな御面ざしで、数日後の悲報は私には到底予知し得られませんでしたので、ただただ御回復を祈りつづけておりました。先生が逝かれまして私どもの身辺、とみに蕭滌たるものあり、日とともに悲しみは深まるばかりでございますが、今となりましては先生の御趣旨に添い日本女医会の再出発のために会員一同力を合わせてできる限りの努力を惜しまないことをここにお誓い申し上げ、暫らくの間のお訣れを申しあげます。先生、安らかにおやすみ下さいませ。

涙もて

埼玉県支部長　東　ヨリ

佐藤さん！

一緒に勉強し、一緒に卒業した貴女と、幽顕境を異にする日があろうなど夢にも思わなかったのに、貴女は、呼んでも届かぬ世界へ旅立ってしまった。悲しみは尽きぬ。

貴女は、学校、至誠会、女医会と、席のあたたまる間もない多忙の中で、何くれとなく、クラス会の面倒も見て下さったものです。私達は、級長さんに従う児童のように、貴女のうしろに蹤いていましたのに。

二年ばかり前、赤坂のホテルでの級会の時、貴女は泌み泌みと、

「お互に長生しようネ」

と言い出しました。会員同調別れる際まで、「長生きましょう」と言い合って別れましたのに、あの会場の壁の色さえ記憶にハッキリしているのに、言い出した貴女が先に逝くとは、何という皮肉なことでしょう。貴女は、世界女医会に、必要なお人でしたのに。

昭和三十七年の秋、四五人の同級が羽田を飛び立った。京都で開かれるクラス会の出席のために。

私達は、一個所にかたまり掛けて、移り変る海岸線や、山のたたずまいを見おろし興じた。この時ほど日本が美しいと思ったことはかつてなかった。琵琶湖の上空に来た時、隣にいた故会長は、ニッコリして、

「モット乗っていたいワネ」

と、私に囁やいた。その笑いこそ、四十数年前、教室で、廊下で、交わしたあの笑顔であった。

京坂の会員の心づくしで、時代祭りの豪華さに酔い、京都の名所めぐりから、奈良ホテルの静寂の中、鹿の遠音に心澄ましつつ、一夜の歓を尽したことは、忘れられない日であったが、故会長は、控え目でありながら、会の主導者であった。

涙が先立って、私のペンは徒らに重い。そして、級友を失った悲しみから抜けることはできないで終った。

が、埼玉支部へ向けられた好意は筆紙に尽し難いものがある。おそらくこれは、全国の支部長さんも同感であろう。

今年の新年会に、元気で出席されたというのに、一ヵ月後に永別しなければならなかったことを思い合わせて、当日欠席のやむなき状態であった事が残念でならない。

佐藤さん！　静かに、安らかに御眠り下さい。貴女の足跡は、大きく残っております。合掌。

友葬る日を病むベット春寒し

御遺体に最後のお別れをして

徳永恵子

化粧して永遠の旅立ち春浅し

春寒く永遠に慈眼を閉じたまふ

御遺影に春料峭の灯影かな

先生の死を惜しみて

大阪六支部長　原　静代

謹んで私達の尊敬いたしておりました、会長佐藤やい先生の御逝去をお悔み申し上げます。

先生は、この日本女医会に、非常な情熱をかたむけられ、かつ将来の発展のために、幾多の事業をかかえて、強い期待をもたれておりました。

その途半ばにしてご他界なさいましたことは先生にいたしましてもまた残された私たちにとりましても返す返すも遺憾にたえません。

先生のこれまでの御指導御尽力に対して私たちはこころからの感謝いたしますとともに、心から先生の御冥福をお祈り申し上げます。

やい先生

阿部秀世

信じ難いように忽然と、余りにも忽然と訪ずれた、佐藤先生の死。私は自分の母の死に感じた悲しみのほかに、何かほんとうに重大ささえを失い、ただただとまどう自分をどうすることもできない想いでした。二月初め、先生御入院の報に接し御見舞申上げた時激しいお痛みの中に、寸時のお話をうかがったことが最後となってしまった今も、なおやい先生、とお呼びしたい衝動にかられる想いです。私は手術後の体を院内の輸送車に托し病院の窓から火葬場に向われる先生の御遺体に最後のお別れをしながら流れる涙にくれるのみでした。

いつも温かい抱擁力の中に智的な正しい決断を下された先生は真に私利、私欲の無い先輩として、又姉のように何事でも安心してご相談、お話できたことが、今更のように懐かしく思われます。河田町の病院や大学に行った時、先生のお忙がしさは承知しながら一寸でも先生のお部屋をお訪ねし、温顔に接し得たよろこびも、も早空しくなってしまい、ほんとうに大きな大きな支柱を失ったこの悲しみをのり越えて、先生の残されたお教えを心深くきざみ日本女医会の一員として進む覚悟を新にし、今はただ先生のご冥福をお祈り致すのみです。

佐藤先生をしのんで

野呂幸枝

日本女医会長佐藤やい先生の御逝去を衷心よりお悔み申上げます。

新参の女医会理事である私など理事会の末席から先生にお目にかかるのみではありましたが、常に微笑を湛えた温厚な御態度に親しみと尊敬の念を持っていました。討論が熱し、興奮が会場に充ちた場合でも、先生の美しい、柔かいお声が流れると、会場は落着きを取りもどし、整った話しあいの場に返った時も度々あったようでございます。

私は常に教育の場にある女医としても佐藤先生に深い近親感を懐いていましたが、ことに私達地方の会員として感激していた点は、地方特有の事情の理解者でいらっしゃったことでございます。頑さの微塵もない寛大な御心で、日本全国女医の発展に大きな御力を与えて下さいました先生を失ったことは、実に実に残念なことでございます。

心から先生の御功績を讃え御冥福をお祈り致します。

噫乎！佐藤先生

大阪　橋本恵美子

この一文が故佐藤会長の追悼記に応わしいものかどうか、ともあれ今の私の心境は型通りの追悼の意を表して、それで事足れりと思うほど簡単なものではない。大変な時に大変な人を失ったという、衝激に近い気持が一カ月経った今日なお取り除けられないのである。余儀ない用事のため私は残念ながら三月一日のお葬儀に参列し得なかったが、十五日に開かれた理事会の席に、生前の会長そのままのお姿をお写真で拝し、その前にゆらぐお灯明と立ちこめる線香の煙りを見つめながら、なお私には会長の死に対する実感は皆無であり、いつものように席についてにこやかに話しかけられている会長をしか感じることができなかった。

大阪女医会報の新春号に一言お願い致しますと申上げておいた会長の玉稿を手に入れたのはもう松の内も過ぎてからだったが、その時の会長のお手紙には多忙のため原稿がおくれてすまないといようなことだけで、お加減の悪い事など何一つ書かれていなかった。

今にして思えばその頃すでに御気分が勝れなかったであろう事は充分察しがつく。

全く、私は最後の最後まで会長に御無理を申上げ、御迷惑をおかけしたようで、何とも胸の疼く思いである。

私が理事として本部に出入りするようになってまだわずかの年数しか経っていないが、私のような若輩、菲才のものをいつもはげまして頂き、大阪から出向いて行く労に対してもいつも温情あふれるいたわりのお言葉を頂いた。会長に接する私自身その都度、先生の大らかな御人徳に触れ、単なる、会長としての畏敬の念を以ってだけでなく、言葉で表現し尽せぬ溢れるような人間味が私をしてますます日本女医会長としての佐藤先生を誇りに思う半面、その余りにも人間らしく完成されていらした先生に段々と厚かましく甘えて、いいたい放題をいわせてもらって来た。怖れを知らぬ向う見ずな私のいうことなすことに会長は頭から否定された事は一度もなかった。なればこそ自分の診療を放棄してでもこの会長の許で、全幅の協力を以って日本女医会を確たる存在に到らしめる努力は惜しまなかったつもりである。

私は日本女医会が唯に国際的友好団体であるという以上に、この日本における最もセンシブルな女の団体として、また良い意味でのセクショナルな団体でもあることを心からこいねがうが故にあれやこれやの注文を会長に提言した。

本部の機構改革、事業計画の充実等々の私のビジョンは果しないがその一部はすでに会長もご承知であった。

会長ご自身会内の刷新と前進に心を用いておられたことも洩れ伺っている。少くとも、日本全国の女達が日本女医会の会員であることに文字通りの誇りと魅力を持つ――そういう会に育てて行きたいという意欲は必らずお持ちであったと思う。

日本の医療にたずさわる私共の方向の一転換期がようやくその芽を吹き出した今日、更に今年こそは世界の民族の和親の旗々が史上空前の威容を盛って東京の上空にはためくというこの期を目前にして、先生の御意志とはまるで違った、極楽浄土とやらに向って一人歩いて行かれる会長を、私は声をかぎりに、今一度戻って来て下さいと泣き叫ぶ。

しかし、なすべきことは余りにも多く、また余りにも峻しい。誰方が次代を荷なわれるにしろ道はまだまだ遠い事を知らねばならない。いかがすれば故会長の御遺志を全うし得るか、更によりよき発展をなし得るか、この辺りで会員の一人々々が真面目に考え、衆智を集めた行動が必要に思われる。

国際女医会員歓迎会でご挨拶をされる先生　＝日活ホテルにて＝（三八、一）

佐藤先生の死を悼む

福島信子

女医会の席上て先生に接するだけの全然個人的なおつ合いもない私ですが先生御逝去の報に接して心からの哀惜を覚えます。承われば、わずか一カ月病床にあられたのみでございましたとか。生あるものはいつか死を迎えるべきとはいえ、あまりにもはかなく思われてなりません。一年に一度もお目にかからないのに、よく透る美しいお声あたたかくやさしいお顔が今も目に見えてまいります。先生の母校愛、誠実な一生のお仕事に対して、常に私は尊敬の念を覚え、強い共感を抱いておりました。昨年大阪にお迎えしました時は御変りなくお元気のようにお見うけしましたのに、又このようなことも再びかなわぬ淋しさをかみしめながら、只ご瞑福を祈る許りでございます。

追悼のことば

大阪第十支部長　今泉テイ

私共女医会長の佐藤やい先生が突如として他界されましました報せを手にして人の世の常とは申せ驚きのために言葉もありません。

佐藤やい先生は誰もが御存じの通り名実ともに立派な会長でありました。医学に対する不断の御勉強が、あの広い大きな人柄の基盤をなしたことはいうまでもありません。

すべて長たるものは冷静な判断と寛容をもってことに当らねばなりません。そして会員相互の和を中心として、筋を通した運営こそ大切です。

この信念によってこそ初めて、会を盛大ならしむることができるものと考えます。この意味においては佐藤やい先生は長として全く理想的なお人柄でありました。

今や医師の動行が色々な点で社会から注目されつつあります今日、この立派な会長が逝かれましたことは重ね重ねの悲しいことであります。

ここに謹んで今日まで成し遂げられました佐藤やい先生の御功績に対し、厚く御礼を申し上げますとともに、安らかな御冥福を心静かに祈ってやみません。合掌。

先生の面影を偲ぶ

大阪第七支部長　島田梅子

昭和三十四年に関東の医学界での重鎮吉岡弥生先生を、次で三十六年には関西の大御所福井繁子先生を亡くした日本女医会は、虫の知らせか二年目毎に大先輩を黄泉の巷にお送りしなければならぬ運命かと、不吉な予感にかられていた私は、三十八年を無事に過ごせた事でホットしていました。その矢先に二月二十六日佐藤会長危篤の報に接し、その驚きもさめやらぬ翌日には早や御逝去の訃音をお受けし、多少時日にズレがあったとは言え、自分の予感の適中に血の気の下る思いが致しました。世俗によく二度あることは三度あるとか、こんな哀しいできごとはこれ切りで結構。

佐藤先生につきましては支部長就任以来まだ日の浅い私には一面識もなく、ただ日本女医会誌を通じての先生でありましたが、御遺稿を想起するにつけ責任感の強い学識経験共に豊かな御円満な人格者だったと推察し、常に敬慕申し上げておりました。御他界により先生の存在がいかに御貴重であり、且つまた活躍発展途上にある女医会のみならず、引いては日本の全女医諸姉のために損失の重大さを改めて痛感する次第であります。

ここに謹んで御生前のご偉業を謝し心から御瞑福をお祈り申し上げて支部代表の悲しみと致します。

三月二十七日

故佐藤会長を偲びて

高知宮地国栄

佐藤会長は人も知る性温厚、円満な方で、上下すべてからその徳を慕われ、尊敬を一身に集めておられました。

当時東京女子医大教授、厚生補導部長の要職にあり、一方日本女医会長、至誠会副会長として席の暖まる間もない御多忙の毎日で、私がいつ上京してもゆっくり御話することもできませんでしたが、昨年十一月末に上京した時は少し腹痛のためとて休んでおられ、久しぶりでゆっくり日の暮れるのも忘れて、学校病院の近況から初まり、五十年近くにもなるおつきあいの昔語りなどしてお別れしましたが、これが最後のお話となりました。

二月二十日病重しとの報に急ぎ上京しましたが、もう昏睡状態で、今日は今日はと御快方を祈りつつの病院通いもむなしく、二月二十七日午後二時二十分御近親、多数の友人、教え子に見まもられつつ静かに逝かれました。

いつも佐藤さんには私は御厄介のかけ通しでした。

一つは晩年研究に志した時、私には新しい血液学の知識など皆無で他人に聞くも恥しい程度で、これを御多忙中の佐藤さんに時々お伺いして、やっとどうにか皆について行かれる位にして下さったこと、いつ伺ってもにこにこと御親切に教えて下さったあの温顔、ただ感謝の涙あるのみでございます。

今一つは最近私に一つの事件がもち上り大分なやまされました。早速御相談いたしましたところ、丁度関西御旅行中との事でお足を延ばされ、高知に御立寄り下さり、有益なアドバイスを与えて下さいました。その頃運悪くも私は乳癌で癌研に入院するという、心身ともに疲労の極に達していました。それを心からいたわりいろいろと御世話下さいました。それによって力を得、其後健康をとりもどすとともに、事件も事なきを得て落着いたしましたことは、全く佐藤さんの賜であると忘れることはできません。このことを佐藤さんと親交の厚かった窪敦子さんにお話しましたら「それはあなただけではない、誰れにでもその通りできるだけの真心であたられる方よ、だから誰れもからあの通り敬愛せられるのよ」といわれました。全くこの言葉をほんとうに佐藤さんの性格のすべてをあらわすものであると感じました。

ここに謹みてはるかに御瞑福を御祈り申上げます。

とび乗りて友の危篤を安ずれば
今日の空路の何ぞ遅々たる
昏睡の友は静かに息きずきて
酸素吸入たゆることなし
奇蹟てふいうこともこの友を
たすけ給えと祈るひたすら
枕辺に闘犬をおき弱り行く
とものファイトをよびさまさんとす
病院に通う日々の足重し
いよいよ危機のせまれるをしる
人のため学び屋のためひたすらに
つくし友はああ今逝きぬ

遺族に抱かれて正門から送りだされる柩

会費十年分前納者氏名

▽加多乃会　出田艶子、松岡和子
▽鶴風会　森寿恵、坂井千鶴子
池松静香、木内徴子
▽至誠会　三原泰江、掛札たき
若林静子、明石寿美子、二見
とめ、笠井和、若木しづ、石
橋志う、跡見一子

佐藤やい先生を悼む

大阪女医会第五支部長　大饗雪

梅の花香う日、先生は多くの夢を残して御逝きになりました。一医師として、医学教育者として、又日本女医会長として、ことに、吉岡先生、福井先生亡きあとの先生はどんなに多事多端な毎日であったことでしょう。ある時はきびしく困難な山道を行くような、ある時は山頂にて汗を拭うにも似た快感を味われましたことでしょう。しかし重責ある御身とて常に、精神的肉体的の疲労が、やがて先生の病巣を造る一誘因ともなりましたことは否めない事実と推察されます。返す返すも惜しい気持で一杯です。峻しい道を開拓し、我々をここまで御導き下さいました先生の偉大な数々の御業績に尊敬と感謝を捧げます。思い出は去年六月総会と箱根行でした。十四、五才は御年上でしょうか老齢の会員によりそうようにしてやさしくいたわり常に身辺に気を配っておられました。人間味溢れる暖かさをしみじみ感じました。又後輩の方々にはいやが上にも士気を鼓舞し、多くの他校出身会員には友好的感じ良き応対振りはなかなか立派でした。今もあの日の若々しい力強い先生の御声が聞えてきます。

謹んで先生の御瞑福を祈り上げます。

佐藤先生

大村　ひさゑ

「今度は行っていらっしゃいね、今年こそチャンスよ、一昨年はお母様の御発病ということでしたが、もう三年目にもなるからご病気も落付いていると思うわ。行っていらっしゃい、石橋先生にお願いするからね」と半ば強制的にさえ感ずるほどの先生の懸命なお電話をいただいたのが昨年の早春だった。

それからというもの子供を無理に旅に出すときの親心のような心遣いの数々、旅費の許可を得るために学長に証明を出して貰うようなことから、羽田空港では姉という立場でお舞い下さったり、亦端守宅へは病気の母を慰めに何回もお見舞い下さったということ。帰った際には「よかった、よかった。今度を逸してはもう再びこのような機会はなかったからね、あなたには苦労をさせるから、何んとかして一度はやらせたかった、ほんとによかった」とまたしても今年を逃してはという今年を非常に強調なさった。先生のこのお言葉がなぜか私には異様に耳底に残っていた。

が、今こうして先生の五七忌の詣でに当って今更のように胸につきあげてくる。

石橋長英先生が独乙で開催の国際治療学会に今度ははじめて女医を推薦したいがと佐藤評議員に相談されたのが三十六年であったとのことだった。

佐藤先生の学郷フライブルグ大学、学友ビフィナー名誉教授のこと、そして佐藤先生をフライシッヒ、ダーメと呼んで愛弟子として指導して下さったというアショック先生のお墓の風景などの土産ばなしに佐藤先生はあの慈母のような眼に光りをたたえてきいて下さったのに。

親であり姉である、やい先生とはいつも時間を忘れていろいろのことを話し合ったけれど、今考えると先生には御自分の御命数の終るのが何かかわっておられたように思われてならない。

故佐藤やい先生を憶う

福田　幹子

人間は重い病気をすれば命を失う、老齢は死に近ずく、それは人生において、きまったことなのです。それなのに私達はこの世から佐藤やい先生を失うそんなことがあり得るものでしょうか考えられることでしょうか。私はこのたび佐藤先生の死に直面して、ただただ茫然たるのみなのです。まだまだこの世の中に働ける人であり、なくてはならない人なのです。その人を失うなどこれをほんとうのことと思いたくないのです。今回の日本女医会誌は佐藤先生追悼号としてみんなで思い出など書こうという相談をしましたが、感きわまって言葉出でずというのはこのことです。思い出のかずかず、思い残しのかずかず胸にせまって感想がうごきません。でもこうして筆をとってみると遠い昔の一コマ一コマが浮んできます。私が佐藤先生を知ったのは先生がまだ学生であられた頃でもう四十五年の昔といえましょう。

その頃の先生は勉学のかたわら母校の事務所員として働いておられました。その仕事ぶりのきびきびとして気持のよいこと、しかも人間がやさしく謙虚であったことこの世の中にこんな学生があるものかと私は眼を見はる思いでした。やがて卒業されて病理学教室に入られ、佐藤清教授の助手として勤めておられた折の御勉強ぶりいつ見ても気持よく、私達が病理学的検査をお願いする時の御親切ぶり全く人まねのできないことのみでした。そのうち佐藤清教授が外国留学をされましたがその留守はやい先生が立派に学生の指導をされました。清教授の帰朝と入替に佐藤先生が独乙のフライブルグ大学に御留学、その御出発の時を思い浮べてみますと全く佐藤先生は我が東京女子医大の宝だという気がしました。その時はようやく学校の名が世に知られた時でした。御出発の日の東京駅は見送りの学生、校友、知人で一ぱいでした。

立派な校旗を先頭にあのふくよかな故吉岡先生のうれしそうな笑顔がつつき、「東の国に咲き匂う」という校歌に送られて鹿島立ちされた、あの張り切った抱負と、勇気にみちた佐藤先生のお顔が今もなお瞼にうかびます。帰朝されてからの先生の名声は日に日にあがってきました。所々の学会における先生の研究報告はめざましいものでありました。私など畑ちがいでも佐藤先生の報告が聞きたさに出かけたこともありました。そのころは女子にして演壇に立つ人はまれにみる位でしたがあの聰明さと、あの玲瓏たる音声は会場を圧しました。私は母校のため、女子の医学を修めるもののために感激の涙を流しました。

ある時私は佐藤先生に伺ったことがあります。それは先生の外遊中は毎日をどうしてお暮しになったかということです。先生のお答は、何しろその頃のフライブルグの大学には日本からの留学生は自分一人だった。毎朝家から大学へゆき夕方大学から家へかえる。

大学ではアショック先生の許で試験管洗いから仕事を始められた。そうして二年間は日本人を見たこともなく、従って日本語を発したこともなかったと、そのお話を聞いてさえ私など胸が一ぱいになります。二年して先生の研究も進んできたので、アショッフ教授は、もうそろそろ見物に出てもよいと思うからパリー、ロンドン等へ行って来いと申され、少し心も軽くなって、見物をして来たとのこと。それから又一年、三年間の勉学が実を結んで御帰朝になったのです。

外遊中三年目に一度日本人の研究生が大学を訪ずれた人があって、その先生と逢った時は胸の開ける思いがしたとお話しになりました。御帰朝後間もなく教授になられ現在に至ったのですが、その間の先生のことは先生に接したことのある方々は、いかに先生が学者であり、人格者であったかということは知る人ぞ知ると思います。

私達同窓は正に吉岡弥生先生の後継者であると思っていました。後輩は挙って先生をあがめ、我々先輩は先輩ぶることなく先生を上に上に押しあげようと思っていました。しかし先生はいつも先輩をあがめ後輩を愛する心を自然に持っておられました。さればこそ先生をほめたたえぬ人はなかったのです。

先生が御病気になられてまだ意識がうすれていなかった時の最後にお見舞した時「先生いかが」と申上ますと、腹痛に困っていられたそのお顔に笑みをたたえて「ああ、もうだめよ」とお答えになった。私は今もなおそのあきらめ切ったようなそのお顔が眼前に浮び忘れることができません。

○日本女医史
A5判　三二八ページ
九〇〇円（〒共）
○資金準備のため会費十ケ年前納（年額壱万円）に御協力下さい。

日本女医会新役員決まる

（全国支部長一覧表）

仁尾千枝子　東京都千代田区神田鎌倉町七（二五一）五二三三
荒川あや　〃　中央区京橋二の一（二八一）〇三七八・三九〇七
大橋リユフ　〃　港区芝新橋六の七二（四三一）〇〇六九・一六一六
竹内茂代　〃　新宿区三光町一（三五一）三四五〇
大久保松代　〃　文京区原町三二（九四一）四九四七
中山義子　〃　台東区浅草寿町三の九（八四一）〇二七五
竹中澄子　〃　品川区東戸越二の九〇六（七八一）二八三五
野間八重子　〃　目黒区富士見台一五六五（七一七）五四九八
中川冨士　〃　大田区本蒲田三の三（七三一）三四九〇・三四二二
菅井カクイ　〃　荒川区尾久町四の一九四六　東京女子医大第二病院内（八〇七）六一五五
砂田スイ　〃　世田谷区代田二の七三三（三二一）〇二九五
長山トシ　〃　渋谷区富ケ谷一丁目三四番八号（四六七）八四九五（病）（四六七）八六九一（自）
日吉すゑ　〃　中野区昭和通二の五二（三六一）一三八一
大石静子　〃　杉並区堀之内一の六六（三一一）一八〇四
山田倭文子　〃　豊島区池袋二の九一〇（九七一）九七五三
河野広子　〃　板橋区蓮沼町七（九六〇）一九二〇
阿部秀世　〃　練馬区桜台二の一（九九一）〇五一八・〇五二三
吉田正子　〃　北区赤羽町二の五七六（九〇一）〇七八三
中条みよ　〃　足立区千住一の三一（八八一）三八一八
浮島せん　〃　墨田区向島請地町一八二（六二一）七五七七
石黒キヨ　〃　江東区深川牡丹町二の四（六四一）三二七九
唐沢寿　〃　葛飾区金町三の二〇二九（六〇七）三四六五
今西隆　〃　江戸川区小岩町四の二〇一一（六五七）五七二六
木俣はま　〃　府中市新成町八八七〇（〇四二三六）二二一二
今鷲子　〃　北海道岩見沢市五条西五丁目（岩見沢）二一三
三上ホフ　青森県弘前市富田三の八（弘前）一六八五
土屋臣子　岩手県盛岡市大沢川原小路（河野弘子方）（盛岡）二八二七
関清子　宮城県仙台市木町末無一一（二三）三六八一
白井とし　秋田県秋田市土崎港新柳町一〇二（秋田）八四二二
箱崎ギンヨ　福島県福島市荒町二七（福島）四七三〇
高間美さ保　群馬県前橋市神明町三三（前橋）六二九六
東ヨリ　埼玉県蕨市大字蕨四九五二（〇四八四）㉛二一一九
滝沢テル　栃木県宇都宮市花房町一八四一（自）六五六三（病）二七六二
延島秀子　茨城県真壁郡大和村東飯田（雨引）（五八）六〇四
犬飼美代　千葉県船橋市本町二の一二二三（〇四七四）二八〇八
中村きぬ　神奈川県逗子市桜山一〇六五（〇四六九三）二一四六
清水友代　山梨県甲府市春日町一二（甲府）③三七〇八
川野辺静　静岡県静岡市常磐町一の七（静岡）②〇六八七
森川みどり　愛知県名古屋市北区東大曾根町本通二の六三二（九八）四五〇六
井出ひろ　長野県佐久市岩村田（岩村田）〇〇四六
松波寿美　岐阜県岐阜市加納本町三の二（岐阜）②〇二五九
本間ムツ　新潟県新潟市関屋下川原町二丁目　②二三六七
伊藤梅雨子　富山県新湊市三日曽根一一一九の二（新湊）二四一〇
荒井梅子　石川県金沢市象眼町六九　②一七四四
青山多美　福井県足羽郡足羽村荒木（酒生）一八
町静子　大阪府大阪市東淀川区一三南之町一の四三（三七一）七七八〇
東条一子　〃大阪市西区北堀江上通一の七二（五三一）三〇三八～九
木下貞子　〃〃　阿倍野区王子町一の二二（六六一）三二五八
前田きぬゑ　〃〃〃　東住吉区矢田矢田部九二五（六九二）〇九五一
大饗雪　〃〃〃　東成区片江町一の六〇（九七一）七七八五
原静代　〃〃　旭区新森小路中一の一八三（三三一）二八九七
島田梅子　〃〃　枚方市岡新町七八の一（〇七二〇四）二四三一
栗本栄子　〃〃　堺市浜寺公園町三の三一（堺）⑥一一七一
根来マサ子　〃〃　八尾市安中一三七（八尾）三五八二
今泉テイ　〃〃　池田市西本町二八一四　池田（〇七六）四九二一
佐々木幸枝　京都府京都市下京区新町通四条下四条町三四八（三五）三二四五
桂田幾代　滋賀県大津市元会所町一四（大津）二二九八
石川まさを　三重県四日市市桜町（孤野）六八
南春枝　奈良県御所市柏原町丸山（御所）一二九
成川千代子　和歌山県有田市箕島町四二六　三五三七・二二八二
堀あさ　兵庫県神戸市東灘区住吉町古寺四八九（八五）六〇三六
津田操　岡山県岡山市国富四一一　②三四一一
多田深雪　広島県豊田郡本郷町（本郷）六三
近藤寿子　鳥取県鳥取市掛出町二五の三（鳥取）二三〇九
奥名竜子　島根県松江市西川津町三一〇五　六一一一
空閑正子　山口県宇部市東区常盤通三丁目（宇部）二〇八七
金倉トク　香川県高松市磨屋町一（高松）二六七五
重松蔦子　愛媛県松山市榎町一四（松山）五一一二
藤田小冬　徳島県名東郡国府町中一七一の四（国府）二六
窪敦子　高知県高知市浦戸町五九　②七七五四
掛札たき　福岡県北九州市小倉区古船場五の八五　㊷一七七六
古賀はま　佐賀県佐賀市大財町三五八
哲翁たまよ　長崎県南高来郡口之津町一一九一（口之津）一六
宮山ふみ　熊本県熊本市横手町一二八四　②〇七一七
山田都美子　大分県大分市府内町一丁目一番一七号　三五〇一
染矢三九　宮崎県東諸県郡綾町大字南俣七六九（綾）三一
水落ヤスエ　鹿児島県鹿児島市郡元町二六〇一（鹿児島）三三一九

第十回国際女医会総会

第十回国際女医会総会に二十七名が参加決定いたしました。

一行二十七名のうち数名をのぞく会員は六月二〇一日（日曜日）二十二時羽田出発、六月二十九日より七月三日までの会議を終え、各国を視察旅行し七月三十日（木曜日）二十一時帰国する予定です。

参加者氏名（順序不同）

出田艶子　松岡和子
中川冨士　森田キヨ
臼井潔子　倉島摂子
石橋志う　三原泰江
若林静子　森川みどり
明石寿美子　長山トシ
二見とめ　若木しづ
飯沼さち子　跡見一子
吉岡敏子　中村西子
天沼もと　坂井千鶴子
木内微子　掛札たき
宮崎悦子　高間美さ保
今井久子　山崎倫子
小野春生

昭和三十九年五月二〇日印刷
昭和三十九年五月二五日発行
編集人　福田
発行人　日本女医会幹
東京都新宿区市ヶ谷河田町19
発行所　日本女医会
電話（341）〇九六八
振替東京六九六八
印刷所　東京都港区麻布田島町63
福田印刷株式会社

題字（故　吉岡弥生）